



「なぜ勉強するの」

この疑問は、多くの子どもが一度は抱いたことがあることでしょう。

中学校や高校で学ぶ数式や定理が直接生活で必要になる場面はいつあるのという物言いは、多くの大人もまた口にする事です。

なぜ、人は学ぶのか。学ぶとは何か。

多くの教育者や哲学者が、この疑問に答えを見出そうとしてきました。

教育哲学者であり教育者であった林竹二は、こう述べています。「学ぶということは、覚えこむこととは全くちがうことだ。学ぶとは、いつでも、何かがはじまることで、終ることのない過程に一歩ふみこむことである。一片の知識が学習の成果であるならば、それは何も学ばないでしまったことではないか。学んだことの証しは、ただ一つで、何かが変わることである。」（「学ぶということ」国土社：1978年）

また、安藤寿康（教育学博士）は、「人はみな異なった知識の使い方をすることによって互いに助け合いながら生き延びる事が出来てきた。」（「なぜヒトは学ぶのか 教育を生物学的に考える」講談社：2018年）と記しています。

学ぶことでその人の中で何かが変わり、人どうしが交わることによって世の中も変わるといえるのかもしれない。

福島県教育委員会は、教育公務員特例法の一部を改正する法律の施行を受けて、平成29年12月に「校長及び教員としての資質の向上に関する指標」を策定しました。「福島県が求める着任時の姿」と「管理職」を加えた6つのステージ（成長過程）を設定し、それぞれのステージにI～IVの4領域と、各領域に対応する14項目を設けています（2021年12月現在）。そして、その領域I「教員としての素養」の一番目の項目である、1「使命感・情熱・向上心」において、「教育公務員はその職責を遂行するために、絶えず研究と修養に努め、自己の取組を省察しながら能力を高めるために学び続ける必要がある。」と掲げています。

教員の研修については、教育基本法第9条において「絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努めなければならない。」と示されており、教員の義務ということになるわけですが、この「研究と修養（この稿では、研修もしくは学びと置き換えて考えます。）」による効果を上げるには、当然のことながら、学ぶ者本人にとって、必要性和成果の自覚があることが重要でしょう。さらには、その前提としての、正しく学ぶための力も必要です。

児童精神科医の宮口幸治は、医療少年院で少年たちと面接をした経験から、次のように述べています。

「悪いことをした子がいたとして、反省させる前に、その子にそもそも何が悪かったのかを理解できる力があるのか、これからどうしたらいいかを考える力があるのか、を確かめなければなりません。もしその力がないなら、反省させるよりも本人の認知力を向上させることの方が先なのです。」（「ケーキの切れない非行少年たち」新潮社：2019年）

これはつまり、学びを始めさせる前に、正しく学べる力があるのかを確かめること。もしそれがないのならば、その力をつけなければならないということかもしれません。

人間は、新生児期から模倣をされるといわれます。これに対して、サルは模倣をしないといわれ、相手による動作を見て自分の身体で同じように表現することは、条件付けによる学習でもないし難しいと考えられていました。

しかし、1952年、宮崎県の幸島のサルが芋を洗って食べることを群れの中で共有していることが発見され、世界的に注目されました。おそらく、学ぶ力のある一匹のサルが模倣をし、他のサルと交わることで、新たな行動として広まったのではないかと思います。

学ぶことは、その人の中で何かが始まり何かが変わることであるならば、その人にとって利益となること、「よかった」と思えることであってほしいと思います。

人が新生児期から模倣ができるということは、生まれて以来の毎日の出来事が人の学びであるともいえるのですが、さらに学び続けるために、「学んでみよう」と思い、学ぶ喜びを感じてほしいと思います。

「なぜ学ぶのか」

それは、学ぶことによって、知らずにいることよりも面白いことに巡り合える。ずっと人生を愉しむことができる。自分の中のいろいろな可能性を見つけることができる。だから私たちは学ぶのである。

そんなふうに私たち大人が思うことで、子どもたちが学ぶことの意味を見出すことができるのではないかと思います。

教育は、夢を語り、理想を描くことができるものです。そして、その夢や理想に近づくための方法や選択肢を増やし、可能性を見出して、実現する力をつけることができるのが教育の力です。

教育に携わる皆様が、夢と理想を持ち続けることのできる世の中であることを願っています。